

# Vision

## 研究者の姿勢

弘前大学医学部生理学第一講座・教授

泉 井 亮

2006年ワールドカップがイタリアの優勝をもって終了した。準決勝に勝ち残ったチームはいずれも強豪揃いで、どこが優勝してもおかしくないという状況で、白熱した試合を堪能できた。決勝戦は、最後はPK戦となりイタリアが優勝したが、この試合でフランスのジダン選手が相手選手に頭突きを食らわし退場となり、このことが今回のワールドカップを後味の悪いものにしてしまった。そして、ジダン選手が決勝戦前日に投票が行われたMVPを受賞したことで、彼の行為やMVP受賞について、今、世界中の話題となっている。この議論の中で、私が気になっていることが一つある。それは、ジダン選手の行為を相手選手から口汚く罵られたためのやむを得ない行為と同情的な意見が少なくないということである。このような風潮が起きている理由は簡単である。ジダン選手が国際的スーパースターだからである。それ程知名度の高くない選手であったならば、この行為を擁護するものはいないであろう。屈辱的な言葉を吐くことは決して誉められた行為ではない。しかし、その挑発に乗って分別なく行動することの方がはるかに悪い。FIFAの良識ある判断に期待したい。

私がなぜ今回のことにこだわるかという点、このような風潮、すなわちその人あるいは機関の知名度が高ければ、過去に偉大な業績があれば、それだけで擁護されるということが現代社会のみならず、研究の世界でも拡大しているのではないかと

と懸念するからである。これをさらに発展させて捉えると、大きな後ろ盾があるから、また、今、時代の流れだから、ということで、たとえそのことが悪であっても隠蔽され、善であっても引き摺り下ろされるという事態がままあるのではないかと危惧するからである。これでは地道に努力してその到達点として成果を得ることに大きな喜びを感じずる研究者は少なくなり、風を読み、寄らば大樹の風潮が加速する。いかに安易に結果（業績）を得るかということに精力と知力を使った結果が、最近、新聞に頻発している論文の捏造であろう。この研究者としては最も重大な犯罪である捏造にしても、取り上げられている例はほんの一部で、個人が、さらに悪いことには組織的に隠蔽している例が少なくないのではないかと考えている。

当たり前のことであるが、研究者は常に自分と社会に誠実で、付和雷同しない姿勢を持つことが大事である。今は流れから外れていても、不屈の精神で絶え間ない努力を続けることがいつか人々の心を打つのである。また、それを公平に評価する社会や組織であって欲しいと願っている。

元来、私自身をどちらかといえば明るい人間であると思っていたが、このような文章を書いたのは、この時期、例年にない弘前の猛暑と湿気のせいであろうか。暗い話になってしまった。

(平成18年7月14日)